様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３３９１８
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２９９７

研究課題名（和文）DV被害者のソーシャルワークの支援理論の構築と研修プログラムの開発

研究課題名（英文）a study on construction of social work theory for dv victim and development of training program for social worker

研究代表者
増井　香名子（MASUI, Kanako）

日本福祉大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：３０８１５２２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、以下のことに取り組み、実践の向上に寄与することを目的に研究を進めた。（１）日本における支援現場の現状を把握し、支援者が実際にどのような困り感などを経験しているのかを明らかにした。（２）DV被害者の親としての経験およびDV家庭で育つ子どもの経験をインタビュー調査の分析から明らかにした。これにより、大人の被害者とともに子どもの安全と福祉を高める支援のあり方の考察を行った。（３）海外の実践調査や資料調査から、先進的な実践や支援の視点を学び、日本に今後導入すべき知見について検討した。（４）支援者向け研修プログラムを開発するとともに、実践で用いるための面接ツール及びガイドの作成を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、DV被害者‐子ども‐支援現場の3者の実態の把握から、支援のあり方を検討したことにある。とりわけ、これまで日本では明らかになっていないDV被害者が経験する子育ての実態とストレングスを被害者のインタビューの分析から明らかにしたことは意義があると考える。
本研究の社会的意義は、研究結果をもとに支援者に支援方策を提供し実践の向上をはかり、DVにさらされている被害者と子どもの安全と福祉を高めることを目指したことである。研究結果を踏まえ、被害者のステージに応じた支援のあり方や支援の視点、面接ツールの開発を行い、多様な支援現場に新たなDV被害者支援の知見や方法を提示した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to contribute to the improvement of practice by addressing the following: (1) To understand the current situation of support sites in Japan and to clarify what kind of difficulties and other problems supporters actually experience; and (2) to clarify the experiences of DV survivors as parents and of children growing up in DV households through the analysis of interview surveys. Through this, consideration was given to the nature of support that enhances the safety and wellbeing of children together with adult survivors. The study also aimed to (3) learn about advanced practices and perspectives of support from surveys of foreign practices and materials, and to consider what knowledge should be introduced to Japan in the future. (4) Based on the above, a training program for supporters was developed, as well as interview tools and guides for use in practice.

研究分野：ソーシャルワーク

キーワード：ドメスティック・バイオレンス　DV被害者　子ども　支援者　支援方策　心理教育　面接ツール　研修

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律（以下、DV 防止法）に明記されている配偶者暴力相談支援センターは都道府県に必置であり、市町村にも設置できる DV の相談機関である。また配偶者暴力相談支援センター未設置の市町村においても DV 相談の窓口が設置されてきている。このように、基礎自治体等において DV 相談に対応する窓口は増えつつある。一方で、DV 相談を担当する職員の非常勤率は高いうえ、相談支援に関する専門知識をもたない行政職が相談に対応している現状もあり、どのように支援の質を高め人材を育成するか課題とされる。また、様々なソーシャルワークの現場において DV は従来から身近に出会う支援課題であり、支援者は DV と支配のメカニズムを理解し、権利擁護の視点をもち被害者への支援や家族への対応を行うことが求められる。さらに、心理的虐待である面前 DV の児童相談所への児童虐待通告件数が増加している。児童福祉分野においても、DV は日常的に関わる支援課題となっており、子どもの安全と福祉（ウェルビーイング）を守るためには被害者である親に対して支援を行うことも重要である。このように相談支援、ソーシャルワークにかかわる様々な支援現場の支援者が DV 被害者への支援力、対応力を備えていることが必要な状況にある。

DV の特性として、親密な関係にあるパートナーからの暴力であること、被害者は支配と暴力により無力化されることがあげられる。また、DV 防止法は、支援は被害者の意思に基づくこと、子どもも一緒に一時保護の対象になるなど他の虐待対応とは異なる特質がある。また、家庭内にある暴力として子どもがいる場合、児童虐待の視点と連携は不可欠である。これらから DV 独自の支援理論の構築が求められるところであり、被害者の経験・子どもの視点・支援現場の実態の理解に基づく効果的効率的な支援方策が実践現場に提示されることが必要である。

しかし、日本において DV 研究は十分ではなく、DV 被害者や DV を経験する家族に対するソーシャルワークや相談実践を支える視点や具体的な支援方策が提示されているとはいいがたい。

２．研究の目的

本研究は、DV 被害者支援において留意すべき三者構造、すなわち DV 被害者－子ども－支援者を理解することによって支援の視点を整理し、被害者の状況（ステージ）に応じた有用な支援方策を支援現場に明示することが目的である。

申請者は博士論文において被害者へのインタビュー調査の分析より DV 被害から「離脱」し「回復」するプロセスを明らかにし、被害者の状況に応じた支援の必要性を示す「DV 被害者支援のためのステージモデル（以下、ステージモデル）」（図）を考案している。

D：加害者と別居 「私」の新生期		D
C：加害者と別居（当初） 生活の再生の時期	C Ⅰ	C Ⅱ
B：一時避難中	B Ⅰ	B Ⅱ
A：加害者と同居	A Ⅰ	A Ⅱ
物理的ステージ 心理的ステージ	Ⅰ：離別の決意なし もしくは、迷いあり	Ⅱ：離別の決意あり ＝決定的底打ち実感

（図）　DV 被害者支援のためのステージモデル（増井　2019）

本研究では、博士論文による研究成果を発展させ、研究期間内に以下のことを明らかにし、日本の DV 被害者支援の向上に寄与することを目指し研究を進めた。

（１）　日本における支援現場の現状を把握する。

DV 問題には DV 支援･女性相談機関に加え､児童福祉機関など様々な機関が関わっている。支援者が実際にどのような困り感を経験しているのかなど現状について明らかにしたうえで、実践を支えるために必要な支援ツールの開発作成の検討につなげる。

（２）　DV 被害者の子育ておよび DV 家庭で育つ子どもの経験を明らかにする。

DV 加害者の行動や暴力は、DV 被害者のみならず子どもにも影響を及ぼす。また、被害者である親の子育てにも様々な影響を及ぼす。DV 家庭における被害者の子育てと子どもの経験を明らかにすることにより、大人の被害者とともに子どもの安全と福祉（ウェルビーイング）を高める支援のあり方を考察し、支援方策を検討するための基礎資料とする。

（３）　海外の実践調査から、日本における今後の支援のあり方を学ぶ。

各ステージにおいて、海外でどのような支援が行われているのかを調査することで、ステージごとの支援の視点を深めるとともに、日本に導入すべき実践知見を探索し、日本の今後の支

援や人材育成の方向性を探る。

（４） 実践の向上のための研修プログラム構築および支援方策（ガイド）を提示する。
上記（１）～（３）の研究結果を踏まえ、支援者向け研修プログラムをブラッシュアップさせ、継続的に研修講師として知見を提供するとともに、実践で用いることが可能な支援ツール及び支援ガイドの作成を目指す。

３．研究の方法

上記の目的を踏まえて、５年間で以下の研究および実践研究を行った。

研究（１）日本における支援現場の現状を把握する

① 研修受講者を対象とした支援における困り感等の実態に関するアンケート調査の実施
② 支援実態と支援の工夫等の実態把握を目的とした婦人相談所と児童相談所職員へのグループインタビュー調査の実施

研究（２）DV 被害者の子育ておよび DV 家庭で育つ子どもの経験を明らかにする。

① DV 被害者へのインタビューデータの分析により DV 被害のなかでの子育ての経験や被害後の心理的影響などを明らかにする
② 子どもの主観的経験を把握するため DV 家庭で育った若者を対象とするインタビュー調査の実施

研究（３）海外の実践調査から、日本における今後の支援のあり方を学ぶ。

① 米国サンフランシスコおよびニュージーランドオークランドにおける支援者へのヒアリング調査の実施
② 米国オレゴン州ガイドライン等の翻訳および分析

研究（４）実践の向上のための研修プログラム構築および支援方策（ガイド）を提示する。

① 支援者向けの研修内容のブラッシュアップと研修講師として継続的な研究知見の普及
② 「DV/虐待の親と子のアセスメント・カンファレンスシート」の作成とそれを使用した事例検討ならびにスーパービジョンの実施
③ 広く支援現場で活用可能な面接ツール及び活用マニュアル（ガイド）の作成と配布

４．研究成果

上記の４つについて研究結果の概要を紹介し、研究成果を示す。

研究（１）日本における支援現場の現状を把握する

申請者が講師を務める支援者向け研修において、アンケート調査を実施したところ、支援経験のある支援者の 9 割以上が困っている（困ったこと）があると回答した。困っているステージは、ＡＩステージに次いで、ＢＩステージが多かったことから、離別の決意のないもしくは関係に迷っている加害者と同居中（一時避難中を含む）の被害者の支援方策の提示が急がれることが示唆された。

児童相談所、婦人相談所職員（各 6 名）に対してグループインタビューを実施し、支援や連携の課題及び、支援や介入の取り組みや工夫などについて把握した。その結果、困難さの背景に、児童相談所では、1）緊急介入時：DV の独自性による支援の難しさ＝アセスメントの難しさ、DV 支配がもたらす認知のずれへの介入、2）緊急介入後：支援からのこぼれ落ちという課題＝その後を見据えた子どものケアと母子への支援の不足と欠如、３）DV 地域支援システムの脆弱さ＝被害親につながる DV 支援の脆弱さ、支援をつなぐ難しさがあることが明らかになった。これらの困難や支援課題に対して職員は、被害親から聴くことや、多角的把握に努めるなかでのアセスメント、さらに、被害親と関係構築を行いつつ被害親に DV について説明すること、子どもの面接、加害親への説明に挑むといった家族メンバーそれぞれに対する関わりを模索していた。

以上からは、支援・介入のベースには、DV と支配のメカニズムの理解が不可欠であること、DV による認知のずれ等に対応する心理教育的支援及び DV 被害を受けている可能性のある人への相談場面でも利用可能な面接ツールの必要性が考察された。

研究（２）DV 被害者の子育ておよび DV 家庭で育つ子どもの経験を明らかにする。

DV 加害者とすでに別居している子どもがいる 27 名の DV 被害者のインタビューデータの分析から加害者と同居中（A ステージ）の被害者の子育ての経験を明らかにした。その結果、被害親の子育ては、加害親による暴力と支配により「親機能の奪われ」を経験すること、一方で暴力と支配に対抗し「親機能の必死の遂行」を行っていることが明らかになった。分析からは困難な状況のなかで子どもを守り、子どもの成長を促進するという多様な被害親のストレングスが見いだされた。また、子どもに関する多様な要因が、加害者との関係の継続の有無に影響を与えていることが示された。その他、被害者調査から加害者と別居後の被害者の多くが PTSD 症状を抱えたまま地域で暮らしていることが明らかになったことからトラウマ・インフォームドケア

の重要性が示唆された。
　DV 家庭で育つ子どもの経験を明らかにするため DV 家庭で育った若者 8 名にインタビュー調査を実施した。分析視点として、加害者が被害者と子どもに行う強圧的コントロール（Coercive Control）を用いた。海外研究では強圧的コントロールの視点を用いて、DV 被害者と子どもの経験が明らかにされているが、日本においてその実態はいまだ明らかにされていないため、この分析視点を採用した。DV 家庭で育つ子どもが経験する強圧的コントロールに着目した結果、DV 加害者は、行動の監視、側に居させる、大事なものを奪うと脅す、教育学習の阻害、閉じ込め、追い出し、無理な行動を強いる、生理的行動の抑制、睡眠の剥奪、性的虐待など多岐に及ぶ強圧的コントロールを子どもに行っていることが明らかになった。また、それらは母親への身体的暴力の際に子どもに同時に行われていた。さらに、被害者である親やきょうだいへの強圧的コントロールの内容も多く語られた。その他データの分析から、子どもには DV 加害者である親の支配に組み込まれる強い恐怖と無力感を抱く初期の記憶があること、被害者である親との関係や思いは肯定的である場合や否定的である場合など様々であり、それには加害者である親の強圧的コントロールの形や軽重、被害者である親からの肯定的メッセージの感受の有無などが影響していること、時期の違いはあるが加害者である親や DV 家庭における生活の継続に対して子どもにも底打ち経験がみられること、それにより、子どもが被害者である親を、加害者から離脱へと引っ張る時期があることなども明らかになった。
　以上の研究からは、DV 加害者は被害者とともに子どもに対して強圧的コントロールを行ない、子どもと被害親の子育てに多様な影響を及ぼすこと、そのことから、加害者の行動に着目し、加害者の行動パターンと家族機能及び子どもに及ぼす影響を深く理解することが重要であることが示唆された。DV 被害者、子どもに関わるいずれの機関においても被害者と子どもの両者を支援の主体とし安全と福祉（ウェルビーイング）の向上を図っていくこと、その際子どもの声や思いを聞くこと、さらに、被害親のストレングスに焦点をあて、子どもの安全と福祉（ウェルビーイング）を高めるために被害親と協働していくことが可能であり、重要であることが考察された。

研究（３）海外の実践調査から、日本における今後の支援のあり方を学ぶ。
　米国サンフランシスコの３機関、ニュージーランドオークランドの３機関に出向き現地調査を実施した。支援者に対しステージモデルを提示し、それぞれのステージにおける支援の実際についてのヒアリングを行った。その結果、両国の共通点として、加害者と同居中の被害者や家族に対する支援プログラムが多く用意されており、それらへのリファーという形で被害者の孤立の緩和や家族の福祉（ウェルビーイング）の向上、加害者への介入、子育て支援が行われていることが明らかになった。その背景には、DV 被害者が離別の決意に至るまでには時間を要するものという共通理解（複数の支援者が「７回家を出たり戻ったりを繰り返しながら関係を決定するのが通常である」と語る）があった。日本においては、「別れないこと」「逃げないこと」について被害者が責められる傾向にあり、また被害者が加害者の元に帰宅すると支援がうまくいかなかったと否定的に捉えられる傾向にある。現地調査から、関係を継続する被害者への眼差しの転換、また加害者と同居中（A ステージ）の被害者とその家族への多重・多様な支援メニューや支援方策・介入策の充実の必要性が示唆された。
　海外の資料調査を実施するなかで、オレゴン州の CPS（児童保護機関）のガイドライン“Child Welfare Practices for　Cases with Domestic Violence”に出会い、研究会において翻訳し、分析、共有を行なった。これは、DV ケースに特化したガイドラインとして作成されており、ガイドラインの信念は、「被害親の安全を高めることは子どもの安全を高める」こと、特徴は、「DV の状況にある子どもや家族（とりわけ被害親）と協力する方策を示す」ことである。ガイドラインには、被害親の子育てのストレングスを包括的に理解すること、ストレングスに基づいて構築されているパートナーシップは、危険性を高める可能性は低く、効果的なケースプランにつながる可能性が高くなることが明記されている。これは、先述した申請者が行ったインタビュー調査から見出した、被害者である親の子育てのストレングス内容と、ストレングスに基づいた支援者と被害親との協力関係の構築という方向性を支え得る先行実践といえる。
　なお、本ガイドラインの基盤となっている知見は、米国で David　Mandel 氏が開発した Safe & Together モデルであることから、Safe＆Together モデルについての資料調査へと研究を進めた。これらの知見を研究会で共有し、実践理解および人材育成のために今後日本の実践に取り入れることが推奨されるべき実践モデルであることを確認した。

研究（４）実践の向上のための研修プログラム構築および支援方策（ガイド）を提示する。
　本研究を通して、支援者は支援に対する困り感をもち、支援の視点や支援方策を持ち得ていない現状で奮闘していることが明らかになった。このことから、研究期間中、新たに得た知見を取り込みつつ、研修内容をブラッシュアップしながら実践者向けの研修を延べ 180 回実施した。また、広く実践者等に向け知見を共有するため、論文等で報告を行った。実践の向上を意図した主な報告は以下のとおりである。
・「DV 被害者の支援の視点：「ステージモデル」から理解を深める」（『社會問題研究』2019）
・「DV 被害者心理とソーシャルワークプロセスに基づく研修プログラム：加害者と同居中の被害者の相談面接実践に焦点づけて」（『ソーシャルワーク研究』2020）
・子ども虐待防止学会の公募シンポジウム『家族間力動の「可視化」から DV・児童虐待への介

入と支援・ケアを考える‐児童相談所のアプローチを中心に‐』（2020）
これらは、新型コロナウィルス慢延により対面での研修開催や研修受講が制限されるなかにおいて、知見普及のための役割も果たしたと考える。
また、事例検討のスーパービジョンを継続するなかで作成した「DV/虐待ケースのためのアセスメント・カンファレンスシート」を研修においても紹介し活用した。研修のなかで模擬事例を示し使用した上で、使用感についてアンケート調査（N＝101）を行ったところ、「支援や対応の参考になるか」について、とてもよい・よいと回答したものは、全体で 95.0%、（児童福祉職員 98.0%、DV 支援・女性相談職員 88.2%）であった。先述した婦人相談所および児童相談所職員へのグループインタビューにおいては、実際に担当事例に複数使用してもらい、その使用感を確認した。その結果、「視覚化することで子どもや被害親の置かれている状況や支援の明確化と俯瞰につながる」「ケース理解時に被害親と子どものストレングスを意識し、着目する習慣づけになる」「児童担当と DV/女性支援担当が一緒に記入すると有効ではないか」「研修・支援者教育に使える」という意見が共通してみられた。

本研究から支援の引き出しを増やす必要があることが把握されたこと、被害者調査から自ら置かれている状況を知ることが被害者の気づきにつながり、自分の人生を取り戻す大きな力となっていることが明らかになったことから、支援者が面接場面で用いる面接ツール「あなたへのメッセージ 大切なあなたのために 絵と図でみる・知る DV（第一版）」および支援者活用マニュアル(ガイド）を作成した。この面接ツールは、以下の 3 部構成である。

ツール１）関係にしんどさを感じているあなたへのメッセージ
「あなたを大切にするための一歩：DV と支配のメカニズムを伝える」
ツール２）暴力から離れたあなたへのメッセージ
「あなたの大丈夫をゆっくりふやしましょう」
ツール３）子どものいるあなたへのメッセージ
「子どもの回復とあなたとのよりよい関係のために」

ステージごとに推奨されるツールについても提示し、面接場面で支援者と相談者が共同で確認できるようにした。基本としてツール１では、DV と支配のメカニズムを説明し気づきを促進する心理教育支援、ツール２では、被害を受けたことで経験する心身の反応やケアについての知識を伝え、トラウマ・インフォームドケアを促進すること、ツール３では、子どもがいる被害者に対して用いることで支援者が子どものための協力関係を被害者である親と構築することに寄与することを目指した。
面接ツールは、研修のなかでバージョンアップを図り、最終年度である 2022 年度に 2500 部印刷を行い、全国の配偶者暴力相談支援センター及び児童相談所に送付した。また、面接ツールを用いたロールプレイ研修プログラムの開発も行い、支援者向け研修会を実施した。婦人相談所、児童相談所、配偶者暴力相談支援センター、婦人相談員、母子生活支援施設等において支援の共通ツールとして使用されていることの報告を受けている。今後も引き続き普及を図っていく。

＊2019 年度より本研究において開催していた「DV 被害者と子どもの支援研究会(FaV-RIC 研究会)」は、2022 年度に「DV 被害者と子どもの 支援実践研究会(FaV-RIC 実践研究会)」として「DV・児童虐待併存ケースの子ども家庭福祉等実践モデルと専門職育成に関する研究」（科研 B：代表者増井香名子）を基盤として開催する形へと移行し、これまでの実践研究の成果を継続し発展させる形を整えた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 増井香名子	４．巻 116
２．論文標題 女性福祉―婦人保護事業とDV被害者支援のこれまでとこれから	５．発行年 2023年
３．雑誌名 福祉研究	６．最初と最後の頁 88－92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 増井香名子・岩本華子	４．巻 22
２．論文標題 児童相談所職員がDVと児童虐待が併存するケースに対応する際の支援課題と工夫―職員に対するグループインタビューより	５．発行年 2022年
３．雑誌名 司法福祉学研究	６．最初と最後の頁 33－50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩本華子・増井香名子	４．巻 22
２．論文標題 市配置の婦人相談員による若年女性に対する支援―フォーカスグループインタビュー調査結果より	５．発行年 2022年
３．雑誌名 司法福祉学研究	６．最初と最後の頁 71－88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 増井香名子・岩本華子	４．巻 62
２．論文標題 DV被害者である親が経験する子育ての実態―当事者インタビューの分析から児童福祉実践への示唆―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 社会福祉学	６．最初と最後の頁 72－85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24469/jssw.62.4_72	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 増井香名子	４．巻 219
２．論文標題 DV被害者の心理と経験過程　共通性と支援の視点	５．発行年 2021年
３．雑誌名 こころの科学	６．最初と最後の頁 36－41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 増井香名子・山中京子・岩本華子	４．巻 46（2）
２．論文標題 DV被害者心理とソーシャルワークプロセスに基づく研修プログラム ： 加害者と同居中の被害者の相談面接実践に焦点づけて	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ソーシャルワーク研究	６．最初と最後の頁 150－155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 増井 香名子	４．巻 69
２．論文標題 母子生活支援施設における職員研修の実践とその効果 ： 暴力被害等を経験した子どもと母への支援力向上に向けて	５．発行年 2020年
３．雑誌名 社会問題研究	６．最初と最後の頁 57－66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24729/00016739	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 増井香名子・岡本正子	４．巻 66
２．論文標題 DV被害者である親への支援の重要性および親と子どもに対する支援の視点－支配のメカニズムの理解とストレングス視点から－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 育療	６．最初と最後の頁 39－46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 増井香名子・岩本華子・山中京子	４．巻 68
２．論文標題 女性を保護支援する入所施設に対する利用者調査からみる施設の特性 ： レジデンシャル・ソーシャルワークの検討をめざして	５．発行年 2019年
３．雑誌名 社會問題研究	６．最初と最後の頁 25－37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24729/00003016	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 増井香名子	４．巻 68
２．論文標題 DV被害者の支援の視点 ： 「ステージモデル」から理解を深める	５．発行年 2019年
３．雑誌名 社會問題研究	６．最初と最後の頁 117－125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24729/00003023	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岩本華子・増井香名子・山中京子	４．巻 68
２．論文標題 市町村の女性相談窓口における支援の現状と課題：DVとDV以外の相談対応に着目して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 社會問題研究	６．最初と最後の頁 13－24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山中京子・岩本華子・増井香名子	４．巻 68
２．論文標題 女性施設における一時保護・入所施設利用の阻害要因に関する質的研究：市町村の相談担当者等へのヒヤリング調査結果より	５．発行年 2019年
３．雑誌名 社會問題研究	６．最初と最後の頁 １－12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計22件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名
増井香名子

2．発表標題
子どもが経験する強圧的コントロール（Coercive Control）―DV家庭で育った若者へのインタビュー調査から

3．学会等名
第22回日本トラウマティック・ストレス学会

4．発表年
2023年

1．発表者名
増井香名子

2．発表標題
DVと児童虐待が併存する家庭の支援―被害親・子どもの支援と支配構造の理解

3．学会等名
日本家族療法学会第39回淡路島大会（招待講演）

4．発表年
2022年

1．発表者名
岩本華子・増井香名子

2．発表標題
市配置婦人相談員によるDV被害者に対するソーシャルワーク実践―初回面接での対応に焦点づけて

3．学会等名
日本社会福祉学会第70回秋季大会

4．発表年
2022年

1．発表者名
企画者：増井香名子、発表者：増井香名子・薬師寺順子・小川衛子・山内 圭・山本容子・丸橋正子・神木亜美・服部隆志・池田かおり・塩見恵

2．発表標題
公募シンポジウム『DVケースにおける子どもの安全と福祉につながる家族力動のアセスメントの再考―加害親の支配理解に焦点づけて』

3．学会等名
日本子ども虐待防止学会第28回学術集会大会ふくおか大会

4．発表年
2022年

１．発表者名
岡本正子・増井香名子・岩本華子・山内圭・浅野恭子・小川衛子・加藤良美・薬師寺順子

２．発表標題
米国マニュアルからみるDVケースの児童福祉実践への示唆①―対応の変遷及び親と子どもの面接に関する検討―

３．学会等名
日本子ども虐待防止学会第28回学術集会大会ふくおか大会

４．発表年
2022年

１．発表者名
増井香名子・浅野恭子・薬師寺順子・岡本正子・山内圭・　岩本華子・加藤良美・小川衛子

２．発表標題
米国マニュアルからみるDVケースの児童福祉実践への示唆②―ワーカーの安全に焦点付けて―

３．学会等名
日本子ども虐待防止学会第28回学術集会大会ふくおか大会

４．発表年
2022年

１．発表者名
岩本華子・増井香名子

２．発表標題
市町村の女性相談・DV相談対応状況：基礎自治体における女性支援の実態把握・基盤整備に向けて

３．学会等名
日本社会福祉学会第69回秋季大会

４．発表年
2021年

１．発表者名
企画者：増井香名子、発表者：増井香名子・薬師寺順子・岡本正子・山本容子・丸橋正子・池田かおり・服部隆志・塩見恵・遠藤智美・小川衛子

２．発表標題
公募シンポジウム『気づきとエンパワメントにつながるDV被害親と子どもへの面接　DV・児童虐待への介入と支援・ケアを考える』「被害親のエンパワメントと気づきにつなげる面接と支援の視点」「DV・虐待ケースの初期面接場面における留意点の検討　オレゴン州ガイドラインを通して」

３．学会等名
日本子ども虐待防止学会第27回学術集会かながわ大会

４．発表年
2021年

１．発表者名
増井香名子・岩本華子・岡本正子・薬師寺順子・山本容子

２．発表標題
DV・児童虐待のためのアセスメント/カンファレンスシートの有用性と支援の検討：二機関の職員調査から

３．学会等名
日本子ども虐待防止学会第27回学術集会かながわ大会

４．発表年
2021年

１．発表者名
増井香名子・岩本華子

２．発表標題
若年者や若年母子ケースへの市配置の婦人相談員の関わりと支援の実態

３．学会等名
日本司法福祉学会第21回全国大会

４．発表年
2021年

１．発表者名
増井香名子・ 岩本華子

２．発表標題
DVの中の「子どもの位置」と被害親の「子どものため」の対処戦略 －DV被害者である親への調査結果から－

３．学会等名
日本社会福祉学会第68回秋季大会

４．発表年
2020年

１．発表者名
岩本華子・増井香名子

２．発表標題
市設置配偶者暴力相談支援センターからの支援経験の分析－「DV被害者支援のステージモデル」に基づく利用者へのインタビュー調査をもとに－

３．学会等名
日本社会福祉学会第68回秋季大会

４．発表年
2020年

１．発表者名
増井香名子・岩本華子・ 冨田英里子

２．発表標題
DV被害者の経験するPTSDとPTG(心的外傷後成長)－被害者調査の結果から－

３．学会等名
第19回日本トラウマティック・ストレス学会

４．発表年
2020年

１．発表者名
企画者：増井香名子、発表者：薬師寺順子・増井香名子・池田かおり・山本容子・丸橋正子・岡本正子

２．発表標題
公募シンポジウム『家族間力動の「可視化」からDV・児童虐待への介入と支援・ケアを考える －児童相談所のアプローチを中心に－』
「ＤＶ被害者と子どもへの介入・支援を検討するための理解枠組み」

３．学会等名
日本子ども虐待防止学会第26回学術集会いしかわ金沢大会，

４．発表年
2020年

１．発表者名
増井香名子・岩本華子

２．発表標題
DV被害者が心理的支配に陥るプロセスの理解－当事者インタビューの分析から－

３．学会等名
第18回日本トラウマティック・ストレス学会

４．発表年
2019年

１．発表者名
増井香名子・岩本華子

２．発表標題
暴力下にあるDV被害者と子どもへの支援と介入の視点－被害親の子どもとの経験分析の考察から－

３．学会等名
日本社会福祉学会第67回秋季大会

４．発表年
2019年

１．発表者名
岩本華子・増井香名子

２．発表標題
市町村における女性支援の向上に向けた支援理論の必要性－その背景からソーシャルワーク実践の検討へ

３．学会等名
日本社会福祉学会第67回秋季大会

４．発表年
2019年

１．発表者名
増井香名子・岡本正子

２．発表標題
DV被害者である親と子どもへの包括的支援と介入、連携の整理

３．学会等名
日本子ども虐待防止学会第25回ひょうご大会

４．発表年
2019年

１．発表者名
増井香名子・岩本華子・山中京子

２．発表標題
施設における女性保護の実態および支援・連携の課題－施設に対する利用者の全数調査アンケート結果をもとに－

３．学会等名
日本社会福祉学会第66回秋季大会

４．発表年
2018年

１．発表者名
増井香名子

２．発表標題
DV環境における母子の経験と離別の決意を促進した子ども要因－被害親の子どもに関連する語り分析から－

３．学会等名
日本子ども虐待防止学会第24回学術集会おかやま大会

４．発表年
2018年

１．発表者名
岩本華子・増井香名子・山中京子

２．発表標題
市町村における女性相談・保護に対する支援の実態と連携課題－アンケート調査をもとに－

３．学会等名
日本社会福祉学会第66回秋季大会

４．発表年
2018年

１．発表者名
山中京子・岩本華子・増井香名子

２．発表標題
女性支援における一時保護・入所施設利用の阻害要因に関する分析－市町村の相談担当者等へのヒヤリング調査より－

３．学会等名
日本社会福祉学会第66回秋季大会

４．発表年
2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 増井香名子	４．発行年 2022年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 6
３．書名 『日本の児童相談所』「第3章 子ども虐待への取り組み　４ドメスティック・バイオレンスと虐待」	

１．著者名 増井香名子	４．発行年 2022年
２．出版社 弘文堂	５．総ページ数 19
３．書名 『児童・家庭福祉』「児童虐待」「コラム：女性の一時保護の現場から「暴力被害」と「生活困窮」」	

１．著者名 増井香名子	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 268
３．書名 ＤＶ被害からの離脱・回復を支援する－被害者の「語り」にみる経験プロセス－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

増井香名子（2022）『面接ツール「あなたへのメッセージ　大切なあなたのために　絵と図でみる・知るDV」（第一版）』
増井香名子（2022）『面接ツール「あなたへのメッセージ　大切なあなたのために　絵と図でみる・知るDV」支援者向け活用マニュアル（ガイド）』

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	岩本　華子 (IWAMOTO Hanako)		
研究協力者	岡本　正子 (OKAMOTO Masako)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関